当団体キャラクター「トム君」

農村 16 きっぷ

農村 16 きっぷは集落と学生を繋ぐ学生ボランティア団体である。現在 41 名の鳥取大学生が所属しており、主には学生のボランティア派遣をしている。また、農村 16 きっぷのメンバーも実際にボランティアに参加している。それ以外にも学生が自分の長所や個性を生かせるグループ活動も行っている。農村 16 きっぷの目的は、農業体験や地域の方との交流の機会を求めている学生と、人手を求めている集落の架け橋になることである。

【発足のきっかけ】

農村 16 きっぷは「NPO 法人 学生人材バンク」の学生プロジェクトの一つである。学生人材バンクは 2002 年に設立され、その後「学生が生の農業に触れる機会を作りたい」、「社会人との交流の楽しさを知ってもらいたい」という思いのもと、農村 16 きっぷが発足した。そして、2004 年に県からボランティアの取りまとめの事務局機能を委託された。

発足当初は 16 の集落とつながりがあった。そのため、16 という数字が「農村 16 きっぷ」という名前に使われている。この名前には集落と学生を繋ぐきっぷのような存在になりたい、という意味が込められている。現在、学生を派遣している集落の数は 149 にまで増えており、今でも新しくボランティア申請をする集落もある。

【団体の特徴・ポイント】

農村 16 きっぷには 3 つの特徴がある。1 つ目は、鳥取県からの委託事業ということである。集落までの交通費や道具代などの金銭的補助があるため、学生に経済的負担が掛からない。そのため、ボランティアへのハードルが下がり、意欲さえあれば誰でも参加できる。2 つ目は、ボランティアの運営をすべて学生が行っていることである。作業内容や日時、派遣人数などを、学生が集落の方と連絡を取りながら確認しているため、メンバーは責任をもって活動を行っている。3 つ目は、活動が 18 年間続いていることである。これは、当団体が発足した当初から先輩が集落との信頼を築きあげ、後輩へ受け継がれてきた賜物である。

【ボランティア情報の発信について】

以前は、ボランティア情報をメール配信システムで発信していた。しかし、学生間で利用率が減少しているメールよりも、SNS を活用する方が情報が拡散されやすい。よって、昨年度から Twitter、今年度からは Instagram の運用を開始した。また、今年度は新型コロナウイルスの影響で、対面での学生勧誘が禁止された。そのため、Twitter では作業内容や写真の発信、Instagram では活動内容をライブ配信で紹介した。その結果、学生が情報を受け取りやすくなり、例年よりも多くの学生から SNS を通して農村 16 きっぷに入団したいと反響があった。

【活動内容】

～ボランティア～

ボランティアは大きく分けて、農作業と伝統行事の補助の２つである。農作業には、田植え、草刈り、里山整備、獣害防護柵設置、水路清掃、花菖蒲園整備などがある。

獣害防護柵設置のボランティアでは、猪や鹿から田んぼを守るために、ワイヤーメッシュ柵の設置を行う。長い時には 10 ㎞もの距離にワイヤーメッシュ柵を設置していく。時には山奥に設置するため、重いワイヤーメッシュ柵を持って山道を登ることもある。実際に作業をしてみると、この重労働を高齢化が進んでいる集落の方だけで行うのは困難であると強く感じた。苦労して設置したワイヤーメッシュ柵も、大雪の影響で曲がる場合がある。曲がったワイヤーメッシュ柵を直すような、災害復旧につながるボランティアもある。

写真1. 獣害防護柵設置の様子

上地集落では、山奥におよそ２㎞も続く土でできた水路があり、溜まった土砂や大きな石を取り除く。山を登りながらの作業であるためとても大変だが、水路に水が流れた時の達成感は大きく、疲れが吹き飛ばされる。また、とても多くの人手が必要となるため、県外の農業団体も一緒に作業を行う。そのため、このボランティアは集落の方だけではなく他大学の学生との交流の場にもなっている。

写真2. 水路清掃の様子

伝統行事の補助は、集落の人手が足りないからだけではなく若者に伝統文化を知ってもらいたいと、依頼されることもある。例えば、今年、無形民俗文化財に登録された「うぐい突き」や鳥取県の伝統芸能である「麒麟獅子舞」、そして大国主命（おおくにぬしのみこと）の復活蘇生に使われたという湧き水を使って栽培されている古代米の田植えや稲刈りなどがある。代々伝わる集落独自の伝統行事を体験することで、新たに集落の魅力を知ることができる。しかし、そのような集落の素晴らしさがあまり知られていないことが、悲しい課題である。今後も、私たち農村 16 きっぷが携わり、少しでも手助けができれば幸いである。

写真3. 古代米の田植えの様子

～グループ活動～

グループ活動は、広報班、販売班、交流班の３つの班に分かれて行っている。

広報班は、年に一度の農村 16 きっぷについてのパンフレット制作、チラシ制作、そしてポスター制作を行う。学生が一からレイアウトや文章を考え、取材も行う。制作したパンフレットは鳥取県内の道の駅や図書館、観光地などに置かせてもらっている。実際に、パンフレットを通して初めて農村 16 きっぷの存在を知り、ボランティアの依頼をする集落もある。

写真4. 取材の様子

販売班は、鳥取県の集落で採れた農作物を加工して、県内外で販売を行う。鳥取県内の人だけではなく県外の人にも、集落の農作物や魅力を知ってもらうことが目的である。販売は主に、鳥取、岡山、東京で行っている。例えば長芋のツルにつくムカゴを東京で販売した際には、東京では珍しいからか、健康志向が高い女性に人気があった。私たちが普段お世話になっている鳥取県の集落で育てられたものが、東京で喜んで食べられていることは私たちにとっても嬉しいことである。また、農村 16 きっぷの活動を県外の人にも知ってもらうため、販売の際に広報班が制作したパンフレットを配布している。

写真5. 東京での販売の様子

交流班は、ボランティア以外での集落の方との交流を目的として農村体験イベントを企画している。これにより、ボランティアでの交流に比べてより深く集落の伝統や文化を知ることができたり、普段はできないような自然体験や料理体験もできたりする。ボランティア以外で、人生の相談に乗っていただいたり集落の方の家に招いていただいたりなど、交流班が企画したイベントがきっかけで活動を超えた交流も生まれている。

写真6. 農村体験イベントの様子

【コロナ禍の活動】

どの集落もご高齢の方が多いため、活動を実施するにあたり新型コロナウイルス感染症対策は徹底的に行った。まず、どうしても人手が必要な場合のみボランティアを引き受けるという方針に切り替えた。そのためボランティアの数が減少し、集落の方からは「学生がい

ない分、普段より作業が大変になった」という意見があった。また、ボランティア後の慰労会を中止にした。ボランティアの醍醐味である作業後の交流ができなくなり、寂しく感じた。また、農村 16 きっぷは週に一度会議を行っているが、人が密集しないようにルールを設けて一部オンラインで行った。やはり普段とは違う会議の仕方にすると、十分に意思疎通を図ることができない時も多々あった。さらに、1 年生の入団が例年より遅れたが、速やかに団体になじめるように、グループ活動の際にアイスブレイクとしてミニゲームも取り入れた。その結果、緊張感を緩和する事ができアイデアが出やすくなったように思う。

さらに、販売班と交流班の活動が制限された。販売班では県外での販売のイベントが全て中止となり、今年度は販売に行く機会が今のところ全くない。従って、現在はこのような状況下でもできる新商品の開発やオンライン販売を検討している。販売の際には商品や鳥取県について自分の口から説明することを大切にしているため、オンライン販売でも同じことが出来ないか試行錯誤している。交流班では、本来は主に集落との交流を企画しているが、現在は行うことが難しい。そのため、今後は農村 16 きっぷ内の団結力を高める事を目的としたスポーツ大会や自然体験ができる合宿などの計画を進めていきたい。

【ボランティア活動を通して】

集落に赴くと、ボランティアに参加しなければわからなかった発見や魅力を感じることができる。ここでは、ボランティアに初めて参加した県外出身の 1 年生が、集落で印象に残ったことを 2 つ紹介する。

1 つ目は、どの集落でも温かく受け入れてもらえることだ。初めて来た学生にも、気さくに話しかけてもらえ、一から丁寧に草刈り機の使い方を教えてもらえた。別所集落では、集落の方と作業中や休憩の間に出身地や農作業の話で盛り上がった。「若い人と話すと元気になるなぁ。」と笑顔で言ってもらい、作業以外でも役に立てたことが嬉しく、こちらも元気をもらった。帰り際に連絡先を交換し、集落の綺麗な風景の写真を送ってくださったり、大学生活の話をしたりして、今も交流が続いている。普段接しない世代の方とお話することで、教養やコミュニケーションの取り方を学ぶ機会を得ることができた。

写真7. 集落の方との交流

2 つ目は、集落によって色々な伝統行事があることだ。会下集落には、約 400 年続く「うぐい突き」という伝統漁法がある。うぐい突きとは、水を抜いたため池の中に、竹で編んだ「うぐい」というかごを突き、泥をかき混ぜながら魚を捕る昔ながらの漁法である。この漁法は、古くから他県でも行われていたが、

写真8. うぐい突きの様子

近年関係者の高齢化や後継者不足で減少している。うぐい突きを誰でも体験できる場所は鳥取県のこの集落だけだという。「たくさんの子どもたちにうぐい突きを体験してほしい。大人になっても忘れない良い思い出になる。」という話を聞いたとき、この伝統漁法を守り続けたいという集落の方の想いを感じ、少しでも力になれるようにこれからも携わりたいと思った。

これら以外にも、美しい自然の風景や美味しい集落の料理、人との強いつながりなどが印象に残った。

【今後の展望】

農村 16 きっぷの OG である山本侑奈さんは、ボランティアを通して集落の方と親しくなり、集落の方の温かさや集落での暮らしの魅力を感じたため、清水川集落に移住した。

そこで、このように集落に興味を持ち、観光する人や移住する人が増えれば集落の活性化に繋がると思った。農村 16 きっぷがそのきっかけとなるために、さらにグループ活動を広げていきたい。販売班では、自然の近くで子育てをしたいと考える人々に鳥取県の集落の魅力を伝えるために、販売領域をこれまで以上に拡大し、東京や大阪、名古屋などの都市部での販売回数を増やしたい。さらに、使用した農産物やそれを作った集落の紹介が書かれた冊子を販売する商品に添付し、購入者に鳥取県について知ってもらいたい。また、販売場所を選ぶことなく、より多くの人に知ってもらうために、オンライン販売をしていきたい。広報班では、県外の若者に鳥取県の集落を知ってもらうため、今年度から制作するパンフレットの方向性を変えようと考えている。昨年までの内容に、集落の暮らしや集落で開催されるイベント情報などを紹介していきたい。交流班では農村 16 きっぷと県外の農業団体との交流の機会を増やしたい。お互いの活動を知ることで自分たちの活動の良さを再確認し、メンバーのモチベーションに繋げたい。

学生は、活動を通して集落と密接に関わることで、世代を超えた新しい出会いや自分自身の夢に繋がる貴重な経験ができる。本格的に将来のことを考え始める時期に、このような代えがたい経験を積める場が農村 16 きっぷにはある。これからも、今までお世話になった集落とのつながりを途切れさせることなく、未来の後輩に受け継いでいきたい。

写真9. 会下集落での集合写真

写真10. 水路清掃の様子